

# 濃尾震災誌序

外談中興

天地間災變の恐るべきもの多し然ども其來る必ず緩急あり因由あり彼の疾風の如き洪水の如き其害甚しといへども豫め天候の徴あり以て之を防禦するの道なきにあらず又迅雷の如きも其區域狹少にして且已に避雷針の頼て以て避くべきあり火災の如き急且劇なりと雖も亦財物を顧みざれば生命を過つことなく惡疫の如きも能く其毒氣に感觸せざる限りは身に及ぶことなく又已に豫防の法あり獨り地震に至ては然らず其來る前兆なく其動く季節なく日時なく驀然として坤軸を爆裂するもの只一瞬間のみ其劇甚の時に當ては智畧も施すべき暇なく又強弱に依て生死を左右すべき道なく只運命の繋る所人力を以て如何ともする能はざるなり故に災變の人を害する皆悲惨

ならざる無きも其最慘苦痛虐の極は未だ曾て地震より甚しきはなし輓近學術大に進み深く地震の原因を繹ね豫知の道を講究する等博士學士諸氏の腦漿を凝らす所素より周到緻密ならざるなしと雖も或は普通斯學に志す者只古來傳ふる所の荒唐無稽なる稗史小説等に基き動もすれば爲に忘想の感なきこと能はず然は則ち今回の地震は一般學者の大試驗場ともいふべきものにして殊に各衙署の調査精竅以て官報に新聞紙に力めて之を詳報し猶且諸大家の實地踏驗の説あり只恐らくは當時報道の事項累々複雑其學説の如きも或は甲論乙駁殆んど世人をして採擇に苦ましむ亦遺憾ならずや我友片山氏資性着實身本縣に在り公務の餘暇地震に屬する諸家の學説を收拾し猶災後報道の事項を網羅し極て重複と妄説とを除去し間々亦自家

目撃の現況を編述し遂に一巻を得名けて濃尾震誌と云ふ上梓に際し余に校訂を求む余不敏敢て當らずと雖も讀過數次謂らく彼の稗史小説の如き揣摩憶測篇を作すの類に非ずして皆事實の正確論説の公明以て全局の始末を概括せり要するに人をして地震の何物たるを知り其最懼るべき天災たるを覺悟し常に之れが用意を怠らざらしむるもの強ち世に裨益なきに非ざるを信ず是此書の起る所以にして余もまた感を同ふするもの義辭する能はず乃ち之を校訂し併せて大意を卷首に書し以て序と爲すと云爾

時明治廿六年三月上澣

柳城石川戈足識於岐阜寓處



## 叙

其境其人眞ニ遇フテ、而シテ益々其境其人ヲ思ハシムル事、世間比々皆其然ラザルハ非ズ、今斯書也、夫レ濃尾大震災ノ實錄乎、亦以テ其境其人ヲ思ハシムル者ト云フベキナリ、加フルニ余ト著書トニ於ケル、等シク是レ斯ノ震災ヲ實地ニ目撃シ、而カモ、自カラ境ヲ其間ニ住シテ、此災ニ遭遇シ來リ以テ正ニ斯書ヲ上グ、語眞ニ境ノ眞ナル亦知ルベシ、人境合スル處、必ズ其眞ヲ見ル者乎、一讀スル者、豈其身其境ニアルノ感ナカラザラン、嗚呼悲極慘憺タル當時ノ現況ハ、歴々トシテ眞ヲ吾人ノ眼中ニ映シ來ルノ感アル者蓋シ尠カラザルベシ、今ヤ其レガ死亡者追善冥福ノ法會ヲ修スルト同時ニ、其レガ遺族者ノ轉過享福ヲ全フセシメント欲スルニ際シ、敢テ是レヲ著者ニ托シ、姑ク當時ノ實況ヲ書寫セ

シメ、以テ人ト我ト共ニ永ク、一ハ紀念ノ爲ニ存シ、一ハ遺忘ノ資  
ニ供セント云

明治廿六年三月下浣

慈眼會主

勝沼信之誌